

マハトマ・ガンジーと仏教

Y・P・アナンズ

中川連一郎 訳

一 仏教との出会い

マハトマ・ガンジーにとって、宗教、霊性、道徳、倫理など、すべての人生の活動は、個公を問わず、「自己実現の追求」という点に統合されていました。彼は自伝のはしがきで次のように述べています。「私がなしとげたいことは、そして、この三十年間なしとげようと必死に努力してきたことは、自己実現、神との出会い、解脱（モークシャ）を達成することである」と。

自己実現を追求するなかで、彼はブッダの生涯と教

えに感化を受けたと直感的に感じるので。彼は、仏教をインドの伝統と隔絶した新興の宗教とはみなさず、歴史的に言えば、インドの伝統を改革し、活性化させるための、最も勇敢な努力とみました。彼は、仏教を最も普遍的な意味での「アヒンサー」すなわち非暴力の教えを広めるための、最も革命的な試みとみたのです。

彼の、「真理は神である」という概念、「自己が他の創造物と同じであり、生物の一部である」という意義をもつ「アヒンサー」の考えは、自己浄化によって獲

得されるものであり、ブッダの教えと同趣旨です。彼は自伝の最後に次のように書いています。「真理を如実にみることは、アヒンサーを完全に実現したのちにしかありえない。(中略) 自己が生きとし生けるものの一部であるという意識は、自己浄化なしには不可能である。(中略) 神は、心の清らかでない者には、けつして現前しない」と。

シッダールタもまた、家族や宮殿から去る際、次のように語りました。

私の心を囚われの身として閉じ込める、この黄金の牢獄

真実を見つけるために、これから私は求めようすべての人々のために、真実を見つけるまで

(中略)

人間のための希望は人間のなかにしかないのだから

そして、まだ誰も私の求めるものを求めた者はない

に拠る所大だが、『ギーター』の教えの真の意味が現れたもので、インスピレーションの源は、純粹な真実に立つ限りまったく問題ではない」と書いています。

二 ヒンズー教と仏教

人種差別に対する闘争を組織し、彼の「サティヤーグラハ」(魂の力、慈悲の力)の理論と実践を進化させた、南アフリカでの長い自己形成期(一八九三―一九一四年)に、彼はブッダとその教えに対する感謝を、初めて表明しました。ダーバンの州立法議会議員に宛てた「公開書簡」(一八九四年)のなかで、インドの偉大さを主張しながら、彼は次のように書いています。「これに加え、インドはブッダを産み出したのです。ある人々は、彼の生涯を、生きとし生けるものなかで最高の、そして最も神聖な生涯だと考えています。また、ある者は、イエスに次ぐ生涯だとみなしています」と。

ダーバンで彼は、ゴータマの慈悲は、すべての生きとし生けるものにおよんでおり、イエスの生涯には、この類の愛を見出すことができないと語り、寄宿先の

この世界を救う私の世界を、誰が退けられようか

(エドウィン・アーノルド『アジアの光』)

ガンジーがロンドン留学時(一八八八―一八九一年)に学んだ最初の二冊の宗教書は、エドウィン・アーノルドによる『バガヴァッド・ギーター』の英訳『天来の歌』(The Song Celestial, 1885)と、ゴータマ・ブッダの生涯と哲学を描いた『アジアの光』(The Light of Asia, 1879)でした。彼は、自伝のなかでこう述べています。「私は、『バガヴァッド・ギーター』の時よりも、大きい興味をもつて、それを読んだ。読みだすと、私は巻をおくことができなかった。(中略) 私の若い心は、『ギーター』や『アジアの光』の教えと、『山上の垂訓』の教えを一つに結び合わせようと試みた。自己放棄こそ、私の心を最も打つ宗教の最高の形であった」と。

一九二五年、ガンジーはインドで、彼の「哲学」はトルストイとブッダを体よく混ぜただけのものだという批判を否定するなかで、「確かにトルストイとブッダ

人を驚かしたことがありました。彼は、一九一三年七月二日の手紙においても、この確信を次のように繰り返しています。「クリシュナ、ラーマ、ブッダ、イエスなどのなかで、誰が最も偉大であるかを言うことは難しい。(中略) 人格という視点のみでみるならば、ブッダが最も偉大であろうが、むずかしい問題だ」と。

一九〇五年三月四日、ヨハネスブルグにおける、「ヒンズー教」についての講演のなかで、彼は、ヒンズー教と仏教の切り離すことのできない関係について述べています。ヒンズー教が非常に硬直した時、ゴータマ・ブッダは出現しました。彼は、動物供養は精神性を奪うものであり、また、すべての生命への寛容が、愛の至高のかたちであると講演しました。仏教のヒンズー教に対する関係は、カトリックに対するプロテスタントの関係に比することができでしょう。ヒンズー教の聖職者たちの嫉妬心を刺激してしまい、仏教は体制の正統教義としては凋落しましたが、その精神はインドに残り、そして、すべてのインド的な原理を活性化しましたのです。ガンジーはその後、生涯にわたってこ

の見解を繰り返しました。

ガンジーは、ブッダが世間的な欲望を放棄し求道の人生を歩んだことに敬意を表し、一九〇七年七月七日付『インディアン・オピニオン』に、紀元前六世紀、ブッダは「多大な世俗的不自由に耐えて、自己実現を果たした。(中略)そして、人々に精神的幸福の思想を広めた」と記しています。

一九〇九年一月二十八日と一九一三年七月十九日、一九一四年六月十日の手紙では、ブッダが彼の妻や両親の元を去り、彼らに救いをもたらしたと、また妻たちがこの犠牲的行為によって、世界から賞賛されていることを称え、ガンジーは、自身の、カストウルバ(ガンジーの妻)への愛着からの自由が、結局は妻への奉仕になったことを述べています。一九一一年八月二十三日の手紙では、彼自身の自発的貧困の状態は、ブッダの状態のようであり、また自己完成への道のようにであると称えました。

一九一五年のインド帰国後から一九二二年の入獄まで、マハトマ・ガンジーは、チャンパラン、アーメダ

義者に対して、真理と愛を掲げて戦ったのです。ガンジーはこう語っています。「子羊を肩に担う」と。ブッダは、動物供犠に勤しむ残忍なバラモンたちを容赦しませんでした。彼の心は愛で満ち満ちていました。「これと比べ、いったい私は何なのであろう。そんな私なのだが、私はこの生命が同様の愛で満ち満ちることを熱望する」とガンジーは述べています。

インドに帰る以前の一九〇一年のインド訪問の折にも、彼はカルカッタの友人に「この残酷な儀式」への反対の意を語りましたが、その友人から、「羊は何も感じない」と言われました。ガンジーは、「私はブッダのことを考えている。しかし、私には出来ないとも思える」と書いています。

一九一六年七月二十七日の講演で、もし、彼らの使命の実行に備えて、ブッダとキリストが数年間荒野で過ごしていなかったならば、彼らは「あのようにはならなかった」だろうと語っています。また、一九一六年十二月二十二日、アラハバードのミューア・カレッジ (Muir College) 経済学協会 (Economic Society) での有

バード、カイラでの地域的サティヤーグラハ運動、インド全域の、ローラット法に対する闘争、そして、非協力運動を率いました。この期間の、ブッダの教えに関する最初の公式の場での言及は、一九一六年二月十四日、マドラスでのキリスト教の会議 (Missionary Conference) でのスピーチです。「ヒンズー教が強力な力たりうるのは、その基調をなす『スワデーシー』(インド独立運動の手段。外国製品ではなく国産品愛用を奨励した)の精神によってであり、ヒンズー教が仏教を排斥したという考えは間違いである。事實は、ヒンズー教は仏教を吸収したのである」と語りました。一九一七年十月二十一日の講演においても、「仏教はヒンズー教と同じ理念を抱いている」と繰り返しました。

この期間に書かれた多数の文章のなかで、彼は、「死を恐れるのは臆病であり、ブッダの教えに反しており、無抵抗は、戦うことができないからではない」と語っています。ブッダとキリストは我々に、悪に對し、直接行動をもって非暴力的に抵抗することを教えています。そして、現実に、傲慢な聖職者や偽善者、形式主

名な講演のなかで、「ブッダ、イエス、そして、その他の偉大な宗教指導者たちは、(中略)望んで清貧に甘んじたのであり」、「物質への狂った執着を我々の目標」とするならば、我々は衰退の一途を辿ることになるであらうと述べています。

三 ブッダの教えの実践

一九二四年の出獄後、五月十八日、ガンジーはボンベイでのブッダ・ジャヤンティ(ブッダ生誕を祝う祭日)で、また、翌年五月七日にカルカッタで講演をし、彼が仏教について本で得た知識は、エドウィン・アーノルドの『アジアの光』、その他数冊の本からのものに限られているものの、「深い尊敬をもって、ページからページへむさぼるように読んだ」ことを明らかにしました。「多くの友人が、私はブッダの教えを自らの生き方で表現していると考えているが、確かにその通りである。(中略)私はその教えに従うよう、最善を尽くしている」と述べています。彼は、これらの講演のなかで、次の点を強調しました。

(a) 彼は「ヒンズー教と仏教の本質的な教義に違いはない」とした。ブッダは「彼自身の生涯においてヒンズー教を生きた」のである。「盲目のバラモンたちは、利己的であったため、ブッダの改革を拒否したのである」。しかし、「行動の哲学者」である民衆は、ブッダのなかに彼ら自身の信仰の真実の唱導者の姿をみたのである。そして、彼自身が民衆の一員となることで、「仏教は民衆によって信仰されるヒンズー教である」ということを、ブッダは知ったのである。仏教は、インドから消滅したのではない。そのすべての本質的な特質は、「名前だけ仏教国である」国々よりも、インドにおいて、現実的な実践となっていたのである。

(b) ブッダは、ヒンズー教を「生命を奪うのではなく、与えるもの」と説いた。「真の犠牲は、他に対してふるわれるものではなく、自らに対してなされるべきものである」。彼はヴェエダを生きた言葉としたが、「聖職者は字句に固執し、精神を失っている」。

仏教徒もまた、無神論者でも不可知論者でもないのであると、ガンジーは述べています。「神は、魂で感じるが知性では到達できない、定義を越えたものである」と。

一九二六年、サバルマティ・アーシラムでガンジーは、『ギター』についての所感を連続して発表し、ブッダの「ニルヴァーナ」(涅槃)と『ギター』の「ニルヴァーナ」に違いはないと語りました。それらは、同じ状態を言っているのです。ブッダが断食中に気を失った際、ひとりの女性が彼の唇に数滴のミルクを与えたとき、「ミルクは彼の食欲を煽ったのであろうか。否。反対に、彼はその後神を見たのだ」とも、ガンジーは述べています。ブッダの「ニルヴァーナ」は、ただ「外観上の不活性の状態」であり、「空無」(シュニヤ)ではありません。それは、「完全な無欲」です。自己の我執の完全な滅却を、「完全な歓喜と平和の絶対的状态」と信じているので、「仏教におけるニルヴァーナとシャンカラ(中世インドを代表する思想家、バラモン哲学の代表、ヴェエダーンタ学派最大の哲学者)におけるバラ

(c) ブッダが試みた改革は、未だに達成されていない。「真理と愛は、最後には勝利する、ということに信頼を置く」ことを、ブッダは我々に教えてくれた。そして彼は、「その教えのままに生きた」。「ブッダの慈悲と敬虔のメッセージを、自身の人生にどれほど体現できているか、我々ひとりひとりが振り返るべきである」。

(d) ブッダは無神論者ではない。仏教は(直接には神の存在を言わないが)敬虔さを説き、民衆は敬虔さ自体のうちに神に近づく。

同時期、その他多くの言及と同様、彼は次のように繰り返しました。仏教は「ヒンズー教の強力な改革であった。仏教は内面の純粹性を正しく主張している。そのアピールは、心にまっすぐに届く。それは、他者に対する優越という傲慢な虚妄を打ち砕く」と。ブッダは、快楽を「結局は苦に至る」ものとして放棄しました。何かを所有することは、彼にとつては拷問でした。我々が皆、異なった神の定義をもっているように、

モン哲学のニルヴァーナに相違はない」と、これより前の手紙にも書いたことがありました。

彼は一九二六年一月四日の手紙のなかで、ブッダ、マハーヴィーラ、ラーマ、クリシュナなど、「アヒンサー」の信奉者は、すべてクシャトリヤだったとして、「アヒンサー」を勇敢なクシャトリヤの宗教として広めたいと述べています。「アヒンサーは、寛大さの極限です。寛大さは、勇者の特質です。アヒンサーは、何ものをも恐れない、ということなしには不可能である」と。セイロンからの帰国直後、彼はサバルマティ・アーシラムで、寛大さは魂の特質であり、ブッダは、我々に「怒らぬことにより、怒りを征服する」ことを求めたと語りました。そして、怒らないこととは、「思いやりや愛の最高の美德」を意味するとも語りました。

時が経つにつれ、ガンジーはさまざまな問題を、さらにブッダの教えに結び付けて考えるようになりました。一九二四年十二月、彼が議長を務める国民会議派のベルガウム年次大会中、歴史的なブッダガヤ寺院は、仏教徒の所有とすべきであるとのセイロン代表の嘆願

に応え、巷間伝えられている動物供犠は「冒瀆的行為」であると言いました。また、ブッダガヤでの講演で、もし、不可触民制が取り除かれなければならないのであれば、彼にとっては仏教徒も含め、ヒンズー社会は衰亡するだろうと語っています。また、裕福な人々のためにニューデリーに建てられた宮殿と、労働者たちのあばら屋のなすコントラストは、ゴータマ・ブッダがそのような悲惨を眼にしたときに受けた、その後の彼の人生と世界の運命を変えることとなった衝撃を思い起こさせるとも語っています。

四 仏教と世界の諸宗教

一九二七年十一月、二週間にわたるセイロン訪問の際、彼は仏教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒やその他の集まりの、大規模な集会で演説しました。すべての講演で、彼はブッダの生涯と彼の教えに言及しました。次に挙げたのが主な論点です。

(a) 偉大なる教師は我々に正しい道を説いてくれた。第一の原理は真理であり、そして次に「すべての生命を愛すること」であり、「生命の個々の純粋」を教えている。これこそ、我々が学舎で学ばなければならぬことである。

(b) ブッダガヤの寺院を仏教徒に返還するために、彼は可能なことは何でもやってきたが、しかし、その目的のためにはまだ困難がある。

(c) ある人々は彼を、「仏教徒」であり、「正統ヒンズー教徒のふりをしながら、仏教の教えを広めている」として「非難」していた。しかし、彼はその非難を誇らしく感じており、また、ブッダの生涯から触発されたものは大きい。

(d) ブッダの教えは、ヒンズー教に絶対不可欠な部分を構成しており、ヒンズー教は、「この偉大なる教師に永遠にわたって感謝しなければならない恩があり」、ブッダは、「最も偉大なヒンズー教改革者のひとり」であり、「ヒンズーのなかのヒンズー」である。ブッダは決してヒンズー教を否定し

たのではなく、逆にその基盤を拡大した。彼は、ヴェーダ（バラモン教の聖典）の言葉から、時代により即した意味を産ませしめた。ヒンズー教が同化しなかったことは、彼の教えの本質的な部分ではなかったのである。事実、彼の教えは、インド以外の世界においても、「すべて同化された」ではなかった。

(e) 仏教の完璧な研究のためには、サンスクリット文献を研究しなければならないし、また、純潔、真理、アヒンサー、不盗、そして、無所有の五つのヤマ（誓願）を遵守しなければならない。

(f) ブッダ、ムハンマド、そしてイエスはアジア人である。ヒンズー文化のなかの永遠不変なものもまた、すべて、彼らの教えのなかに見出される。もし、すべての偉大な信仰に共通する最も偉大な基準を探すならば、我々は、「真実かつ非暴力たれ」という、とても単純な要素にたどり着くであろう。

(g) ブッダが神を信じなかったという見解は、「ブッ

ダの教えの最も中心的な真実に矛盾している」。彼は、神の名のもとに行われていた動物供犠のような、「卑しい行い」を否定したのである。彼は、「森羅万象を貫く永遠普遍の道德的統治の存在を再び宣言した。（中略）その法こそが神であった」。このことからまた、「ニルヴァーナ」の概念についての混乱が起こってきた。それは、「我々の基盤をなすもの、（中略）我々の内にある邪悪なもの、（中略）腐敗した、そして腐敗しやすいものすべての消滅である」。それは、「墓場の死の平和」ではなく、「魂の生きた幸福」である。

(h) ブッダは、「すべての生命に対して、卑しめてはならないという厳しい敬意を払っていた」。しかし、仏教が国外へ流布していくに伴い、この「動物の神聖さ」に対する感覚は、あたかも我々は自身の行いの結果を避けられるかのごとく、その意味を失った。「人類が、より低級な創造物の神であり主であるというのは、傲慢な虚妄である。逆に、人類は（動物より優れているという虚妄より）偉

大なるものを託されている。人間は動物の王国を保護する義務をもつ」。さらに、「もし、動物が神に屠られることがないとすると、どうして我々の快樂主義のために屠られねばならないのだろうか」。ブッダは我々自身、すなわち、欲望と世俗的野心を屠れと言ったのであり、他の生物を屠れと言ったのではない。

(i) 「ブッダは、世俗的な幸福をすべて放棄した。なぜなら彼は、真理を求め、刻苦しつつ自己を犠牲にして得られる幸福を、世界中の人々と分かち合いたいと望んでいたからである」。「今日、欲望を増大させるために、駆けずり回つては、世界の真実の内実、真実の知識を得たと空しく思っている人々が、私たちはいったい何をやってきたのだ、と振り返る時が来つつある」。

(j) ブッダの精神は、生命を「享樂と名声の塊とみるのではなく、責務と奉仕の収束として」みるのである。そのことが、人間を獸と分かつかつのである。この故に、「飲酒」の習慣は、「ブッダの精神と完

全に矛盾する」のである。

(k) セイロンでも行われている不可触民制は、「すべての優劣の差別を否定したブッダの精神に全面的に矛盾する」ものである。

(l) ブッダの「偉大なる慈愛のメッセージ」に敬意を表すのならば、カーディー（手紡手織の衣服）を着なければならぬ。

五 仏教と非暴力

一九二九年三月、ガンジーは、もう一つの仏教国であるビルマ（ミャンマー）を訪れ、多くの公共の集会や宗教集会でスピーチしましたが、彼が強調したのは次の点です。

(a) セイロン、ビルマ、中国、日本の仏教徒が、ガンジーは自分たちの一員だと言った時、ガンジーは光榮に感じた。「ヒンズー教に対する仏教の関係は、コントラストはより強いが、カトリックに対するプロテスタントの関係のようなものである」

という理由の故である。

(b) パゴダで、彼はこう語った。「ビルマでは仏教僧侶たちが政治運動の指導的立場に位置していることが嬉しい」、しかし、彼らは「いかなる嫌疑もかけられないほど純粹」でなければならぬし、その運動を「偉大な智慧と偉大な力」に結びつけなければならぬ。そうすれば、ブッダの精神がすべての人々をこの運動に導くであろうと。

(c) 「人類の偉大な教師のなかのひとりによって、この世界に発せられた最も偉大な真実のひとつ、すなわちアヒンサー」を彼らはもっている。彼らは、人生のすべてにおいてそれを実践すべきである。賢く用いることで、それは「自身を救うことになり、人類を救うことになる」。それは、この世界で最高の能動の力である。「それは、生命を、光を、平和を、幸福を発する」。しかし、このメッセージは、「ビルマの心の表面をただ触れただけ」だったのかもしれない。例えば、「アヒンサーの法が至高の位置にあるときには、嫉妬もなければ、

無意味な野心もないし、犯罪もない」。しかしビルマでは、殺人が日常のことであった。インドのほうが十分に、ブッダのメッセージを受け取っている。

(d) ブッダは、彼の周りにある抑圧、不正義、邪惡に打ち克つために、タパス、すなわち苦行を行った。ここに居並ぶ僧侶も、苦行を通して他の人々を導かなければならぬし、經典の精神を引き出さなければならぬ。そうすれば、動物の命を奪うこと、喫煙、飲酒、そして臆病は、ブッダの愛の教義に反することに気づくであろう。

(e) ブッダの教えに従うものには、一瞬の怠惰の時もない。

のちに、一九三八年のビルマでの暴動の際、ガンジーは、どのように仏教徒が蛮行に陥ったかが理解できませんでした。それには僧侶までもが積極的に関わったのです。同様に、一九四七年、ビルマのリーダー、アウン・サン将軍と彼の同志が暗殺された際、ガンジー

「それはそのことを『大悲劇』とみなしました。そのような政治的殺人を犯したテロリストは、犠牲者たちの方を悪と考えていると語りました。しかし、このような方法で権力を握った者は、『人々に対し暴力を犯しているのである』と。彼は、市民生活をおくる上での生命にかかわる原則として、『ただ選挙によって選出された人々のみ、非暴力の義務を免除される』と説いています。

ビルマから帰国後、ガンジーは再び、不可触民制に反対するキャンペーン、また、サティヤーグラハなどの運動とその結果の投獄などという、目まぐるしい闘争の日々に身を投じました。一九四四年の出獄から彼の暗殺まで、国内の第二次世界大戦後の政治的問題、共同体間の紛争調停の問題に、ガンジーはより深く関わりました。しかし、このような期間にも、ブッダや彼の教えにたびたび言及しました。

一九二九年、ガンジーは、ブッダのような預言者たちは「悪い伝統を打ち砕くことによって」彼らの宗教を保ったと書き、語りました。彼らはひとり立ち上が

りましたが、「彼ら自身、そして彼らの神に対し、生きた信仰をもっていた」と。

一九三二年、彼は再び語りました。彼らは世界に抗してひとり立ちましたが、しかし「謙虚そのものであった。そのような謙虚さをもつためには、人は自身に、そして、神に信仰をもたなければならない」と。一九三四年、彼はN・K・ボース（文化人類学者）に次のように説明しました。「ブッダのような預言者の教えには、変わってはいけない部分もあり、変わるべき部分もある。変わるべき部分とは、時代の要求に適合すべき部分である。この変わるべき部分を維持しようとして、今日の宗教は、たくさんひずみを生じている」と。

「パンの労働」や肉体労働の美德を広める際、ガンジーはこう語りました。イエスは大工でした。ブッダは托鉢で生きていましたが、「遍歴の苦行者」も肉体労働をしなければなりません。彼自身、『ギーター』の黙想の一節よりも労働の一節のほうが好きでしたし、「完全な脱俗の考えにはけっして惹かれなかった」、「その思想のみが世界に影響を与えた、ブッダのような人

物もいる」と語りました。

六 祈りの力

ガンジーは、祈りの力を強く信じていました。ブッダ、イエスやムハンマドは祈りを通して「光」を見出し、祈りなしには生きていけなかったのだと語りました。精神は神への信仰なしでもやっていけるということとを仏教が教えてくれたと考えていた、仏教徒のチャールズ・ファブリ（Charles Fabri）との対話のなかで、「しかし、仏教は長く祈り続けています」と語りました。祈ることのできない人は、「真実のブッダ」を限定するべきではありません。懷疑主義と知的概念は、人生の危機の時には助けてくれません。しかし、「神、また祈りの意味を知るためには、自分をサイファア（アラビア数字のゼロのこと）にしなければならぬ」のです。霊性的概念のみが助けてくれる困難な時期に、我々は初めて神をみます。「それが祈りである」と。ブッダ、イエスやムハンマドもまた、神にまみえるために断食をしました。

一九三五年に、ワルター・アーシユラムのガンジーを、一人の日本人のサドウー（ヒンズーの苦行者、聖者のこと、ここでは日本の出家者のこと）が訪れました。彼はそこに滞在し、マントラ（題目、つまり「真実の宗教を与えてくれる方、ブッダに私は帰依する」を意味する「南無妙法蓮華経」をもつて、夕方の祈りを始めたのです。第二次世界大戦が始まり、警察が彼を連行した際、彼はこのマントラを唱え、ガンジーに彼の太鼓を残しました。それ以来、セワグーラム・アーシユラムでの朝夕の祈りは、この修行者ケシャブの「純粹で一途な献身」を思い起こすために、このマントラから始められました。

ヴィヴェーカーナンダ（近代インドを代表する思想家、宗教家）と同様、ガンジーも「シャンカラはインドから仏教を追いたてた。なぜなら、彼自身が『仮面の仏教徒』と呼ばれたほどであったから。彼は、ただ単に、仏教に忍びこんでいた悪いものを取り除いただけだったし、ヒンズー教からの離反を防いだだけであつた」と信じていると繰り返しました。ともかく、ブ

ツダの教えの実体と純粹さは、インドに最もよく残されています。「ヒンズーのなかのヒンズー」として、ブッダはヒンズー教に新たな指向を与えてくれた」。

ガンジーはまた、仏教は「その外観を知ることからでは」理解できないと語りました。グライ・ラマへの手紙のなかでガンジーは、「仏教が生きたためには、秘密主義と迷信」を捨て去らなければならないと要求しました。

ガンジーがブッダを崇敬した理由の一つに、「貴賤上下を明確に区別する不可触民制の完全廃止」がありました。ブッダは次のように語りました。

生きとし生けるものを、すべて家族とせよ。

同じ色で流れる

血には身分の違いなどない。同じ鹹味で流れる

涙にも身分の違いなどない。だれも

獣の印を額におされ

首に聖なる糸を結び、

生まれ出ることはない。

悪行をなしたものが、悪の結果を結ぶ。
(エドウィン・アーノルド『アジアの光』)

同様に、カーデーイーを広める運動でも、彼はブッダの貧しい人々への思いを強調しました。

七 非暴力の実践

あるインタビュアー（一九三七年）のなかで、彼は、ブッダの非暴力運動の効果は、「長続きし、また、時とともになくなっていくだろう」と述べています。対して、ヒトラーやムッソリーニ、スターリンの暴力の結果は、当初は際立ってみえますが、それは一時的なものでしかないとも語りました。

偉大な伝道師であり、また平和の戦士のひとりであるブッダに対し、彼は最大の尊敬を抱いていました。ブッダ、そして六百年後のイエスは、単なる個人的美德ではなく、「本質的に社会的、共同体的美德」を我々に教えてくれました。

別の文脈でガンジーは、ブッダの時代、今のような

政治形態は存在していなかったので、政治の領域における非暴力の実践というインド国民会議派の実験は、新しいものであると語っています。

マドラス管区軍事委員会 (Madras Provincial War Committee) 発行のリーフレットに、「ブッダやマハトマ・ガンジーの教えに例示される」平和への「偉大な理想」のために、第二次世界大戦は開始されたと書いてあるのをみたとき、彼は、これは「真実でない」として、この個所を削除するよう要請しました。「もしブッダが今、この世にいたならば、このような戦争はけっして出来なかったろう」し、また「アショーク大王のみが、意識的に戦争を放棄した大王の唯一の実例なのだろう」と語りました。

一九四七年、ビハールにおいて、共同体間の暴力が勃発した際、「ブッダやジャナカ王」、ラーマ王の「神聖な地」が、「暴力という悪魔のダンス」をみてしまっているとは彼は苦悶しました。非暴力の手段によって、古代の栄光を回復することができます。彼は、ビハールにおける悪慣習についても、同様に批判しました。

ガンジーは、「アジア人のためのアジア」という原則には賛成できませんでした。インドを含めアジア全体に仏教の影響があります。アジアは、ブッダのメッセー지를学習しなおし、それを世界中に届けなければならぬのです。後に、一九四七年のアジア関係会議 (Inter Asian Relations Conference) でのスピーチで、「智は東より来たった。ブッダやその他の預言者も東より到来した。西洋は今日、智慧を切望している。原子爆弾の増大に絶望している。(中略) 世界にその弱さと罪を教えることはあなた方の責任である。これは我々の教師たちの教えである」と語りました。

最後に、暴力と憎悪が至るところに蔓延していた彼の晩年に、ガンジーは、彼が「現代のブッダ」であるということを否定しました。ブッダやその後の預言者たちは、「戦争を止めさせるための道」を歩み続けました。彼らは平和と幸福を確立することができました。ガンジーができなかったのは、そのような力がなかったことの「決定的な証明」であり、「平和を構築できなかった」故に、彼は神聖な人間ではないと言うのです。

非暴力と中国仏教

前川健一

「非暴力」とは直接的には不殺生を意味する。中国に仏教が入ってきた当初、中国人にとって最も強い印象を与えたのは、仏教の説く不殺生の思想であった。⁽¹⁾ 最初期の中国仏教について記す『魏書』「釈老志」では、仏教の思想として五戒を取り上げ、その中でも不殺生戒について特筆している。中国でつくられた疑経『提謂波利経』でも五戒が中心内容をなしている。実践的にも、不殺生思想にもとづく菜食や放生（魚介などを殺さずに解放すること）・水陸会（水陸の様々な生き物を供養する法会）は盛んに行われている。また、不殺生戒は、

仏教のみならず、道教の戒律にも影響を与えているという。

儒教では、もともと祖先に対して肉などを捧げるのが通例であり、不殺生の思想は中国人にとっては全く異質なものであった。そのため、中国では仏教の特徴として不殺生が注目されたのである。一方、仏教がもたらした因果応報の思想は、殺生が悪報をもたらすことを教え、そのために、不殺生は広く受容された。因果応報の思想は、仏教が伝来する前の中国伝統思想にもあったものであるが、それは自らの犯した罪が子孫